（別紙様式）

令和６年度かながわ学びづくり実践研究推進校　実践報告

真鶴町立まなづる小学校

研究テーマ：粘り強く学ぶ子の育成
～読みの視点を明確にした「読みたい」と思える授業づくりを通して～

１　実践の目的

児童が学習課題に粘り強く取り組んだり、協働的に学びを深めたりすることができるよう、その基盤となる「読解力」の育成をめざす。そこで様々な文章を読む力を育む教科である国語科を対象とし、次の３点に焦点化した研究を進めることとした。

①読みの視点の明確化・共有化
②語彙力の育成
③読書活動の推進

これらの焦点化した内容を追究することにより、児童が、学習課題に添って大切な言葉を押さえながら正しく文章を読めること、想像を広げて読み深めること、課題解決のために繰り返し文章を読むこと、といった具体的な読解力を身につけることができ、本研究がめざす「粘り強く学ぶ子」の育成につながると考えた。このことから、本校では３年計画での研究を推進している。

２　実践の内容

（１）校内研究の体制

今年度は３年計画の２年目の研究にあたり、次の内容を深めていきたいと考えた。

・「読みの視点」の精選とさらなる明確化・共有化を図り、児童に定着させること。
・児童が習得した読みの視点を活用して文章を読むこと。
・教科書教材「言葉の宝箱」等を活用して児童の語彙を増やすこと。

上記を追究するため、教員は説明文と文学作品の２つのブロックのどちらかに所属し、各自年間１本の授業提案（全体研・ブロック研のいずれか）を行うこととした。

なお、この研究の理論的な部分をご指導していただくために、山梨大学大学院総合研究部教授の茅野政徳（かやの まさのり）先生を招聘し、「読みの視点」を明確にした授業のあり方についてご教授いただいた。

（２）研究授業の様子

今年度実施した授業提案の中から、説明文と文学作品の各ブロックから一つずつ実践を紹介する。

【説明文】５年１組
単元名：「資料を用いた文章の効果を考え、それをいかして書こう」
教材名：「固有種が教えてくれること」
「自然環境を守るために」
「統計資料の読み方」
単元で扱う読みの視点：
「意見・主張」「要旨」「筆者」
「原因と結果」「資料と文の関係」

本単元では、「説明的文章を読むこと」という読む学習内容と、そこからつながる「意見文を書くこと」という書く学習内容を一つのくくりとして単元化を図った。

まず「読むこと」の学習では、筆者の人となりや、読みの視点を生かした文章構成、文章に資料を活用することの効果について、児童が主体的に読み取るための手立てを工夫した。本単元で用いた主な工夫は、クイズ形式や文章のリライト、異なる規模での段階的な意見交流の実施であった。

その後、児童は「読むこと」で学んだ筆者

の表現方法や伝え方の工夫、資料活用の効果を活用して、総合的な学習の時間に取り組んだ「環境問題」についての意見文を作成した。

【文学作品】４年１組

単元名：「つながりを見つけながら読み、おもしろいと思ったことを話し合おう」

教材名：「友情のかべ新聞」

単元で扱う読みの視点：

「人称視点」「文種」「登場人物」
「行動と表情」「対比ことば」
「気持ち」

児童にとって国語教材で初めてふれるミステリーというジャンルの作品を、既習の読みの視点を使いながら読み深めていくという単元である。

本単元では、ミステリーの世界観に浸ること、推理を楽しむこと、読書に親しむことといったねらいに迫るため、主に次の手立てをとった。

- 単元の導入で他のミステリー作品を読む。
- 授業の終末ごとに自分の推理をする。
- 授業の展開に合わせ、本文を場面ごとに区切って提供する。
- ミステリー作品のポップをつくる。
- 並行読書マトリックスを活用する。

児童は叙述に基づき、推理の根拠をあげて意見を交流していた。登場人物や気持ちの変化など、作品全体をとおして読み取った事柄が自然と児童から表現されていた。また、この学習をきっかけに、たくさんのミステリー作品を読む児童が増えた。

これら授業提案の後は、全教員が参加して研究協議を行った。また、各回茅野先生または指導主事を招聘し、実践に基づく具体的なご指導をいただいている。

３　実践の成果と課題

（１）子どものアンケートから

児童へのアンケートを５月と 11 月に実施した。特に顕著であった変容は、「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」という項目に対し、「当てはまる」と回答した児童の割合が 22%から 34%と 12 ポイントも上昇し、「どちらかと言えば当てはまる」と答えた児童の数も加えれば、11 月段階で 82%となっている。

（子どもの変容）

アンケート結果にも表れたように、学習課題に対して粘り強く主体的に取り組む児童の姿が増えたと感じている。国語の授業では、児童から既習の「読みの視点」にふれる発言が出てくるなど、少しずつではあるが継続した指導が児童に定着してきている。

（教師の変容）

ブロックの全員で授業を創るという意識で、指導案作成の最初の段階から複数の教員で丁寧に話し合い、細かく改善を図っていった。一人一人の教員が授業づくりに深く関わることから、一本の研究授業から得られる学びは多い。特に経験の浅い教員は先輩の教員の提案から学んだことを自分の実践に取り入れる姿があり、授業改善に向けた OJT としての効果が高かった。

４　今後の展開

次年度は研究の最終年を迎えることから、改めて読みの視点を児童が主体的に活用する場面の創出をめざす。そこで、児童が活用を図る具体的な姿を明確にするとともに、この学びから豊かな読書活動に広げるための方策を追究していく。引続き茅野先生にご指導をいただきながら、研究テーマ実現に向けた実践を教員全体で創り上げていく。